

## メッセージアウトライン マタイの福音書5：8 「心のきよい者は幸いです」

[8]「心のきよい者は幸いです。その人たちは神を見るからです」

このことばはどのような意味であろうか。いまだかつて神を見た者はいない。人間が手で作った形ある偶像の神々ならば見るができるであろうが、天地万物の創造主である真の神は霊的な存在であるので人間の肉眼で見ることはできない。しかし、イエスは、心のきよい者は神を見ると言われる。それで、ここでイエスが説教しておられることは「心」に関してであるということを知っておかなければならない。

キリスト教の信仰は、単に教理や理解力や知性の問題ではなく、心の在り方を問われることである。もちろん知的なもの、理解力といったことも必要である。私たちが聖書を読み、理解できなかつたならば、信仰を持つことはできないであろう。しかし、単に聖書に知的関心を持つだけになってしまうとき、それは頭だけの問題となってしまう。当時、旧約聖書の教え、律法を守ることに熱心であったパリサイ人たちは本来ならば真のいのちと救いを得させる聖書のことばを、いつしかそれをただ形だけ、表面的に守ること、単なるうわべだけのいかにも善人ぶった行いというものに変えてしまった。→マルコ7:9-13

しかし、イエスは心の状態に目を向けさせるのである。

ではこの「心」とはいったい何か。それは単に愛情や感情が出て来るところというような意味ではない。聖書によればそれは人の存在と人格の中心を意味し、理性や感情を含むすべてのものが湧き出てくる場所である。それゆえ、幸いなのはその存在の中心において、そのすべての行動の源において、きよい人たちなのである。しかし、残念ながらこのような人たちはどこにもいない。

人間の内側から出てくるものは良いものではないと聖書は教えている。→マルコ7:21-23

人間の持っている罪のゆえにこのような忌まわしいものが現れてくる。

普通、一般に言われていることは人間のあらゆる悪事は環境によるのであり、人を変えるにはその環境さえ変えればよいという考えがある。しかしながら多くの人々のまじめな努力にもかかわらず、事態は一向に良くならない。相変わらず世界中で犯罪や戦争が起り、いじめやパワハラ、殺人、家庭内暴力等、争いごとは絶

えることなく、悲劇は繰り返されている。

聖書は最初に人間が墮落したのは、その環境において申し分のないエデンの園、パラダイスであったと教えている。→創世記2章 しかし、そこにおいて人は罪を犯してしまった。→創世記3章

したがって、人間を完全な環境に置くことによって、すべての問題を解決することはできないのである。人間の心からすべての問題が起こってくる。

エレミヤ書13:23には次のように書かれている。

「クシュ人(エチオピア人)がその皮膚を、豹がその斑点を、変えることができるだろうか。それができるなら、悪に慣れたあなたがたも善を行うことができるだろう」

さらに17:9には次のように書かれている。

「人の心は何よりもねじ曲がっている。それは癒しがたい。だれが、それを知り尽くすことができるだろうか」

使徒パウロは言う。→ローマ7:18~21

「私は、自分のうちに、すなわち、自分の肉のうちに善が住んでいないことを知っています。私には良いことをしたいという願いがいつもあるのに、実行できないからです。私は、したいと願う善を行わないで、したくない悪を行っています。私が自分でしたくないことをしているなら、それを行っているのは、もはや私ではなく、私のうちに住んでいる罪です。そういうわけで、善を行いたいと願っている、その私に悪が存在するという原理を、私は見出します」

聖書の言う「罪」とは的外れという意味がある。人間は神の望んでおられる正しい生き方から、自分勝手な生き方にそれてしまっている。すべての人間がこの状態にある。

根本的な問題は人間存在の中心である「心」にあるのである。したがって人間は教育や社会環境を改善するだけではこの悪の問題、罪の問題を解決することができない。人間の心がはなはだしく悪に染まっているところに真の問題がある。自分はそのような悪い人間ではないと多くの人々は思っているかもしれない。しかし、真っ白な紙に一点インクの汚れがついているだけで、それは不良品となるのと同じように、神は私たち人間のどのような小さな罪汚れも許されず、大目に見ることをなさらない聖にして義なるお方なのである。

確かに警察に捕まるようなことはしていないかもしれないが、心の内では人を憎み、ねたみ、さばき、呪い、殺意を抱き、人の失敗や落ち度を喜び、平気でうそをつき、

自己中心な思いに突き動かされているかもしれない。

ここでイエスが言われている「きよい」ということばには「純真」「誠実」「二心のない状態」という意味がある。一点の欠けもないこのような心の状態に私たちはいることができないのである。

しかし、このように見てくると心のきよい人など誰もいないことになり、当然のこととして神を見ることは誰もできないということになる。しかし、それで終わってしまっただけではイエスは何のためにこの5:8節でこのように言われているのかわからなくなってしまふ。

しかし、気落ちしてはならない。このような状態の私たち人間の救いのためにイエス・キリストは天からこの地上に来てくださったのである。キリストは人となってこの世に来てくださったが、決して罪は犯されなかった。あの悪魔の誘惑を受けたときも聖書のことばによって悪魔を退け、決して罪は犯されなかった。→マタイ4章使徒ペテロは言う。→ I ペテロ2:21~22

「このためにこそ、あなたがたは召されました。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残された。キリストは罪を犯したことがなく、その口には欺きもなかった」

では具体的に私たちはどうすれば心をきよくすることができるのか。それは私たちが自力で頑張っとうとうとしてできることではない。できるのは私たちに働いてくださる神のみである。

聖書は言う。→ピリピ1:6

「あなたがたの間で良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださると、私は確信しています」

私たちに良い働きを始められるのは、まず神の方なのである。神は私たち信仰者に聖霊を送ってくださり、その聖霊が私たちの内にあって、私たちの心をきよめてくださるのである。イエス・キリストを自分を罪から救ってくださる救い主として信じた者は三位一体の神の第三位格である聖霊なる神が与えられている。聖霊は信仰者を助け、導き、きよめ、成長させてくださるお方である。

→ヨハネ7:38~39、14:26、15:26、16:13~14、使徒1:8、2章…五旬節の出来事二千年前にイエス・キリストがこの地上に来てくださった時から、この良き働きは開始された。そして今も神を心から信じ従う信仰者の間でこの聖霊の良き働きは続けられているのである。

この地上にある限り、そこには相変わらず罪との戦いがあるが、信仰をもって主により頼みつつ歩んで行くときに内なる聖霊の働きにあずかり「心のきよい者」とされるのである。

私たちが心をきよくされるというみわざは確かに神によるものである。しかし、神が私たちの心をきよくしてくださるのを待ちながら、なおもこの世の流れに流される卑俗な人生を送ってよいという意味ではない。ヤコブ4:8には「神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます。罪人たち、手をきよめなさい。二心の者たち、心をきよめなさい」とある。それゆえ、私たちは自分でできるあらゆることをして(→コロサイ3章、Iコリント9:25~27)、しかもなお、それでは不十分なので最終的には神がしてくださるのを信じつつ生きるのである。

「その人たちは神を見るからです」とは肉眼で神を見ることができるというのではなく、信仰の目によってできることなのである。晴れた秋の夜空を眺めるときに、そこには星が無数に輝いているのが見える。天文学者でないかぎり、私たちは色々な星を識別することができないが、しかし、信仰の目にはそれが神の御手によって造られたすばらしい作品だということが分かる。→詩篇19:1~6

同様に私たちの身の回りを信仰の目によって見るときに、そこに確かに神のみわざが、様々に見てとれ、神の働き、神の臨在が感じ取れるのである。渡り鳥の群れ飛ぶ姿に、街路樹の枯れ葉の舞う姿に、朝日が昇り、夕日が静かに沈むその姿に、海岸に果てしなく打ち寄せる波に、そして私たちの出会う人々とその交わりの中に、神の臨在を感じることもできるのである。

私たちは不完全であっても、なおこの意味で神を見ていると言える。

そのようにして神を見、神の臨在を感じるということは、やがて私たちが行く神の支配される天の御国の前味を味わうということであり、それは幸いな事であり、私たちに大いなる喜びと感謝と神への一層の愛を私たちにもたらすことになるのである。

最後に→ピリピ3:12~14